

# 小論文

（注意事項）

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てもはいけません。
- 2 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 3 解答用紙には、解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入しなさい。  
①氏名欄  
氏名、フリガナを記入しなさい。  
②受験番号欄  
受験番号（算用数字）を記入しなさい。
- 4 問題用紙にも受験番号を記入しなさい。
- 5 問題用紙、解答用紙は持ち帰ってははいけません。

（解答上の注意）

解答はマークによる解答と記述による解答があります。両方とも解答用紙の所定欄に記入しなさい。マークによる解答は、例えば 

10
----

 と表示のある問いに対して3と解答する場合は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄				
10	①	②	●	④	⑤

受験番号	
------	--

問1 次の1～5のものを数えるときに使う助数詞として、正しいものをそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、 ～ 。

- |   |         |       |       |       |       |
|---|---------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 山       | (1) 頂 | (2) 台 | (3) 座 | (4) 軒 |
| 2 | 鱒子(たらこ) | (1) 房 | (2) 腹 | (3) 袋 | (4) 片 |
| 3 | 兎(うさぎ)  | (1) 目 | (2) 頭 | (3) 毛 | (4) 羽 |
| 4 | 烏賊(いか)  | (1) 杯 | (2) 枚 | (3) 墨 | (4) 尾 |
| 5 | 箆筒(たんす) | (1) 個 | (2) 机 | (3) 脚 | (4) 棹 |

問2 次の6～10の傍線部の漢字として、正しいものをそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、 ～ 。

- |    |                  |       |       |       |       |
|----|------------------|-------|-------|-------|-------|
| 6  | タ ン テ キに述べよ。     | (1) 単 | (2) 端 | (3) 短 | (4) 丹 |
| 7  | ドロ ジ アイを繰り返す。    | (1) 試 | (2) 事 | (3) 示 | (4) 仕 |
| 8  | 意見をテ ツ カイする。     | (1) 徹 | (2) 迭 | (3) 哲 | (4) 撤 |
| 9  | こう 言 うとゴ ヘ イがある。 | (1) 語 | (2) 誤 | (3) 御 | (4) 呉 |
| 10 | 日本海は魚のホ ウ コだ。    | (1) 豊 | (2) 奉 | (3) 宝 | (4) 芳 |

問3 次の11～20の言葉の遣い方について、正しいと思うものには①、誤っていると思うものには②をマークせよ。

解答番号は、 ～ 。

- |    |                           |
|----|---------------------------|
| 11 | 長年の下積みを経て、ようやく主役の座を射止めた。  |
| 12 | 年末年始の掻き入れ時に、休業するとは何ごとか。   |
| 13 | 危機一発のところで、助かった。           |
| 14 | まさかのときのために前後策を練っておいてくれ。   |
| 15 | 万雷の拍手でお迎えください。            |
| 16 | あなたには黙否権が保障されています。        |
| 17 | 遺憾なく実力を発揮する。              |
| 18 | あの二人、同窓会で焼けぼっくりに火がついたらしい。 |
| 19 | 人の揚げ足をすくってばかりいると、会話が続かない。 |
| 20 | 怒り心頭に発して、思わず大声を出した。       |

問4 次は俳諧文学に関わる俳人・石 寒太の文章である。この文章の内容、筆者の主張をふまえて、次の1～4より一題を選び、それについてまとめなさい(解答用紙に、まず、選んだ題名を明記すること。本文の字数は四〇〇字以内。句読点も一字に含む。箇条書きではなく、文章で表現すること)。

1. 「芭蕉の功績」
2. 「俳諧や俳句の誕生した意味」
3. 「俳諧と俳句の違い」
4. 「連句の意義」

石 寒太

俳句は、五・七・五の十七の文字で表現される極端に短い詩です。みなさんも、一度や二度、俳句をつくった経験があるのではないでしょうか。また、いくつかの有名な俳句をおぼえているかもしれません。それほど現在も親しまれ、愛されている俳

句ですが、その歴史をたどっていくと、連歌というものから始まっています。

連歌は、五・七・五(長句)と七・七(短句)をべつべつの人がかけ合うという形式をとりませんが、古く『万葉集』の中に、大伴家持と尼あまとによるかけ合いの作品がみられます。のちに、五十句、百句とつらねた五十韻、百韻などといわれる長い形の連歌も見られるようになりました。そして、南北朝時代(一三三六〜一三九二)に入ると、「応安新式」(注1)とよばれる連歌のつくり方の規則ができあがります。さらに、室町時代(一三三八〜一五七三)に入り、心敬しんけい、宗祇そうぎといったすぐれた連歌の指導者があらわれて、連歌は文学性の高いものになり、室町時代末期に里村紹巴じょうはという人が出て、純粋な連歌が完成します。

しかし、その一方で、格式にとられない自由な俳諧の連歌というものがつくられるようになりました。この「俳諧の連歌」は、略して「俳諧」とよばれ、「連句」ともいわれました。「俳諧」とは、もともと滑稽こっけい(おもしろさ)を意味することばです。

江戸時代(一六〇三〜一八六八)に入ると、松永貞徳まつながていとくを中心とする「貞門俳諧」や、西山宗因しんざういんを中心とした「談林俳諧」が盛んになりましたが、貞門、談林のことば遊びや上品な笑いの俳諧にあきたらず、新しい詩的な俳諧を求める人々の動きが出てきました。

松尾芭蕉も、そんな新しい俳諧への動きの中から出てきたひとりでした。

芭蕉は、正保元(一六四四)年、伊賀の国阿拝郡小田郷上野赤坂(いまの三重県上野市赤坂町)に松尾与左衛門の二男として生まれました。

十三歳のとき父を亡くし、十九歳のころから五千石の侍大将の藤堂新七郎のあとつぎである良忠よしただに仕えました。良忠は芭蕉より二歳年上、俳諧が大好きで、俳号を蟬吟せみぎんといいました。芭蕉はこの良忠とたいへん仲がよく、いっしょに俳席にもつらなりました。

しかし、良忠は、寛文六(一六六六)年の四月、急逝きゅうせいしてしまいました。芭蕉の落胆はたいへんなものでした。以後の四年間、芭蕉の動向ははつきりしていません。

寛文十二(一六七二)年の春、二十九歳の芭蕉は、俳諧師として立つために故郷の伊賀上野を去り、江戸に出てきました。芭蕉は、はじめは貞門俳諧を学んでいたのですが、しだいに談林俳諧の気風を濃くしていきました。西山宗因を迎えて高野山の別院大徳寺で開かれた百韻の催しに参加した芭蕉は、たちまち頭角をあらわし、以後、桃青とうせいという俳号を名のり、当時の談林の新風を身につけました

延宝八(一六八〇)年の冬、芭蕉は江戸市中から隅田川を越えた、深川ふかがわの草庵にひっこしました。このときすでに宗匠そうしやう(俳諧の指導者)として多くの門人をかかえていましたが、物欲や俗世間の出世をたちきって、ひとり「わび」の世界を求めたのです。その草庵に、門人の李下りかから一株の芭蕉の木が贈られたことから、俳号を「芭蕉」としたのです。

芭蕉がそれまでの俳諧をはなれて、ほんとうの蕉風俳諧をめざすようになったのは、旅に出てからです。貞享元(一六八四)年の八月、四十一歳の芭蕉は、門人の千里ちりをつれてはじめての旅『野ざらし紀行』に出ました。この旅は、「野ざらしを心に風のしむ身かな」という句があるように、自らの転機をめざした覚悟の旅だったのです。この旅をはじめとして、『鹿島紀行』『笈おひの小文』『更科紀行』『おくのほそ道』などの旅を重ね、そのすべてを紀行文につづり、多くのすぐれた句を残しました。

その中でも元禄二(一六八九)年の『おくのほそ道』は、日本の紀行文学の最高傑作といわれるもので、この旅をとおして「不易流行」(不易ふたえきは永遠に変わらないもの、流行は時代とともに変化していくもの)や「かるみ」などの芭蕉の美学が完成されていきました。

元禄七(一六九四)年の五月、芭蕉は最後の旅となる上方かみがたへ立ち、九月に入って西国へ向かう途中、大坂で病にたおれました。同年十月、「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」の辞世の句を残して、とうとう帰らぬ人となったのです。五十一歳でした。

芭蕉がなくなつたあと、門弟たちは、蕉風俳諧の本質的なひろさや深さを理解せず、それぞれが、勝手に自分たちの信じる芭蕉像を正しいものとしてたがいにゆずらなかつたので、蕉門はばらばらにわかれていってしまいました。

芭蕉がなくなつてようやく五十年がすぎたころから、「芭蕉に帰れ」という芭蕉復帰の動きがみえはじめました。そのころの俳諧を「中興俳諧」といいます。こうした動きの中できわだった活躍をみせたのが、与謝蕪村よさぶらそんです。(中略)

さて、江戸時代の俳諧を理解するうえで、ひとつ注意しておきたいことがあります。いままでみてきたように、明治以前の俳諧は連句が中心になっていたということですが、

みなさんは、俳句というものは、五・七・五だけの一句が独立したものと考えているでしょうが、それは、明治になってからのことです。正岡子規が連句の発句ほく（歌仙注2）の第一句目）を独立させて、俳句とよび、文学の価値を高めたのです。子規の俳句革新は、俳句を文学として屹立きつりつさせはしましたが、一方では、連句の座（共同でひとつの作品を作りあう場）をうしなうことにもなりました。

この本に収録されている『山中三吟やまなかさんぎんりょうげんかせん』（注3）をお読みいただければよくわかるように、連句の座では、たえず、他の人が詠んだ前の句に触発さへされながら、まったく新しい世界をきりひらき、変化させて展開する作業がくりかえされます。芭蕉も蕪村も一茶も、江戸時代の連句の世界から切磋琢磨せつさたくまして、それぞれの個性ある作品をつくりあげていったのです。こうした共同作業の舞台のたいせつさを知ることが、江戸時代の俳諧を理解するひとつの鍵になるかもしれません。

俳諧とは、ひとりではなく、共同体の宴うたげの場から生まれたということ、それが日本の短詩型文学の大きな特色ともいえるでしょう。

（俳人）

（高橋治著『おくのほそ道ほか』（講談社）より。石寒太「解説」。出題に当たり、原典にあるルビ、小見出し等を一部省略している。）

問4の設問 下書き用（清書は解答用紙に書きなさい。）

（解答用紙に書いていない答案は、採点の対象になりません。）

1																			
5																			
10																			
15																			
20																			

（注1） 「応安新式」とは、応安五（一二七二年）、二条良基よしもとが、連歌師・救済ぐけい（「きゆうせい」「きゆうぜい」ともいう）の協力を得て制定した、連歌式目・第一巻のこと。一般に「連歌新式」ともいう。それまで雑多であった連歌式目を統一し、勅許ちくしよを仰いで世にひろめ、以後の規範となった。

（注2） 「歌仙」とは、①すぐれた歌人のこと。六歌仙や三十六歌仙などが有名。②連歌・俳諧の形式の一つ。長句と短句を交互に、三十六句続けたもの。二枚の懐紙ふちじ（歌懐紙）の第一紙の表に六句、裏に十二句、第二紙の表に十二句、

裏に六句を書きつける。和歌の三十六歌仙にちなんだ名称で、蕉風確立以後、連句形式の主流となる。三十六句連ねて区切りをつけ、これを「歌仙を巻く」という。ここでは、②の意味。

(注3)

『山中三吟両吟歌仙』とは、『おくのほそ道』の旅の途中、加賀・山中温泉やまなかに滞在した、芭蕉、同行の曾良、金沢の俳人立花北枝はくしの三人で詠んだ三十六連句集のこと。当初は、三人で三吟だったが、曾良が体調不良で先に帰り、芭蕉、北枝の二人の両吟となった。

(問題はここまで)